ある魔女のお話

ユウカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある魔女のお話

【Ｎコード】
Ｎ０８７７Ｄ

【作者名】
ユウカ

【あらすじ】
これは、ある魔女のお話・・・・なんで、彼女が魔女になったんでしょうか・・・・悲しい悲しいダークファンタジーの始まり・・・・

第一章

・・・・さびしい・・・

・・・・助けて・・・・

そこで、私は夢から目覚めた。
いや、夢ではなく声を聞いただけだ。

いつから、こんな声を聞くようになったんだろう・・・・・

私は魔女である・・・・・

いつから、私の運命はこうなったんだろう・・・・・

・・・

私の名前は、カーリー。変な名前かもしれないけど、私はこの名前が好き！
年は、１４歳。　もちろん、女の子！！！
性格は・・・バカだけど、優しいの！！　と思うけど・・・・
残念なことに、私には友達なんていない　それが一番悲しいことなの。
なんで、私に友達がいないか？だって？？　あんまり教えたくないけど、教えてあげるよ！
私はね、変な力を持ってるの。　カッコよくいえば超能力者なんだ。
人が思ってる事とか分かるし、探してるものとかどこにあるかすぐ分かるんだよ～～

小さいころ、そのことを話したらみ～～んなバカにしてた。大人もバカにするし・・・・
でも、だんだん私の言ってることが本当だと分かったら今度は気味悪がって、誰も私の近くに来ることはなくなった・・・　ひどいと思わない??
　だから、私には友達がいないの・・・・・・・・

でもね、家族というすばらしい人達がいるの。
私の家族は、カッコイイお父さんに優しいお母さん、天才なお姉ちゃんがいる。
あぁ～私って、なんて幸せなんだろう！
友達なんていなくても、この家族さえいればぜんぜん平気！！
　それに明日は、私の誕生日！！！！
だから明日は、お父さんはいつもよりはやく帰ってきてくれると思うし、お母さんはおいし～～い手料理を作ってくれて、お姉ちゃんは私が飛び跳ねるくらい嬉しいプレゼントをくれるだろうなぁ！！
　あぁ～！！　早く明日になれ～～～～～～

・・・・・・きっと、私はこの誕生日のせいで私の運命が変わってしまったと思う・・・・・

第一章（後書き）

初めて、書いた作品です！！

第1話：誕生日

・・・・すべては私の誕生日から、始まったんだろう・・・・・・・

私はいつも起きるのが遅い。お母さんに起こしてもらわないと絶対に起きないもん・・

でも、今日はいつもより早く起きれた。だって、だって、だって！！

今日は私の誕生日なんだから！！！！！

いつもより早く私が起きてきたのがお姉ちゃんとお父さんはびっくりしたらしい。

お母さんは、私は自分の誕生日の日は早く起きると知ってるから驚きもせずただニコニコ笑ってるだけだし・・・・・

早く起きるとなんだか暇だ！そこで私は、冷蔵庫の中を見た。

すると、そこには豪華なおかずがたくさんある！！！！！

今日の誕生日パーティのための料理の材料だと思う！

「ねぇ、ねぇ、お母さん！！今日の夕食は何の料理なの？？」

私がそう聞くと、お母さんは笑顔で答えた。

「帰ってくるまで内緒♪」

そう言われて、私もつい笑顔になった。

でも、パーティの前に学校へ行かなきゃならなかったことを思い出した・・・・

学校へ行くと、私を見て全員が一歩下がる。
他人が見たら、私を女王様に思うだろう・・・・
しかたなく、私は全員が避けてくれた道を通った。　はぁ～、嫌な気分・・・・
まぁ、いじめられるよりはマシだよねぇ～～　とポジティブに考えることにした。

学校では、昼食以外は寝てた。友達のいない私のすることはこれしかないし・・・・
早く家に帰りたいとしか思えなくなった。家に帰れば、ここにいる人達と違って私の力を気味悪がらない家族がいるんだから！

学校が終わって、急いで家に帰った。走ってきたので、家の前で自分の呼吸を整える。
そして私は家のドアを思いっきり開けたのだ・・・・・

・・・・この家に悲惨な運命が待っていたとも知らずに・・・・

第1話：誕生日（後書き）

ご感想やアドバイスを
よろしくお願いします！！

第2話：悲惨な出来事

・・・あの時、家に帰らなければよかった・・・・・

・・・あの時、家のドアを開けなければよかった・・・・・

・・・・・・思い出すと後悔することばかり・・・・・・

・・・・・??あれ?おかしいなぁ。・・・・・・

ドアを思いっきり開けたら、家の電気がついていないことに気付いた。

電気がついていないせいか、なんだか暗い・・・・

もう家族は全員帰ってきてるハズ。・・・　それに、この赤い液体はなんだろう??

私はその液体を触り、さらににおいを嗅いでみた・・

・・・・・血だ・・・・・・

私の心のどこかに恐怖という感情が出てきた。

私はおそるおそるリビングへ向かう・・・

もしかしたら、私を脅すためにやったのかもしれない。電気を消して、血をわざと見せて、びくびくしてる私に
「お誕生日、おめでとう！！」
と言ってくれるかもしれない・・・・　　そうだ！、絶対にそうに決まってる！！！
　しかし、私の予想は見事にはずれていた。

リビングに入ると、家族はいた・・・・・
けど、倒れてる？？　寝てるの？？
　・・・・・・・・いや、死、死、死んでる！！！！！！！

「い、い、いやぁぁぁぁぁぁーーー」

私は叫んでしまった。嘘だ、嘘だ、嘘だ、嘘だ！！！！信じるものか！！！！！
「お父さん！！！お母さん！！！お姉ちゃん！！！！！！！」
家族の一人一人の体を揺らしてみたが、だれ一人も動かない・・・・
全員、体は血まみれ。白い壁も真っ赤だ。これはどうみても殺されたんだ！！！
なんで殺されてるの？？　いつやったの？？
　　私の大切な家族を誰が殺したの？？？？？

・・・そのときは、後ろに人がいるとは思わなかった・・・・

・・・・悲惨な物語の・・始まりだった・・・・・・

第2話：悲惨な出来事（後書き）

ダークファンタジーみたくなりました！！

第3話：あの声

・・・・・私の誕生日に私の家で私の家族が死んでいた　・・・・・

・・・・・今でも、ものすごく思い出したくないけど消えない思い出・・・・・

・・・・あの不思議な声を初めて聞いたのもこの日だった・・・・・

後ろで物音がした。　でも私は振り向かなかった・・　怖さより悲しみの方が多かったからだ

・・・・・もう何がなんだかよく分からない・・・・・・
悪夢なら、早く覚めて！！　早く私を起こして！！！！

でも何も変わらない・・これが夢じゃないってことは、自分がよく分かってる。
私は認めたくないだけなんだ・・・家族の死を・・・・

「まだ人間がいるわ！！！！」

知らない人の声が聞こえた。ふと、我に返った・・・・
そうだ！！！まだ忘れてはいけないものがあった・・・・・・
私の家族は、私の家族は！！
・・・・殺されたんだ！！！！！！！！！！！！

私はすぐに後ろを振り返った・・・

そこには、知らない女性が二人いた。その二人の女性は黒いスカートを穿いていて、一人は６０代くらいのおばあさんで、私を睨んでる・・・

もう一人は２０代くらいの美人な女の人だった。さっきの知らない人の声はこの人の声だろう

「あんた達、誰??」

私は、つぶやくように聞いた・・・・・・・

「あんた人間かね??」

おばあさんが私の質問を無視して、質問した。

普段の私なら、無視したことを怒っていたと思う。でも、今は普段の私ではない・・・・

「・・・はい。」

いつのまにか私は敬語になっていた。おばあさんがすごく睨んだからだろう・・・・・

すると、二人はものすごく驚いた顔をした。

私が何かいけない事を言ってしまったのだろうか??

・・・しばらく沈黙が続いた。

その後、おばあさんと美人な女の人が勝手に話し合いをした。

声を潜めてたのでよく聞こえなかったけど、私のことでなにか話してるみたいだった・・・

その話し合いはなかなか終わらなかったけど、ぼぉ～としている私に美人な女の人が気付いて、笑顔で声をかけようとしてくれた。

「ねぇ、あなた・・・・・・」

――――――――――――――――――――――――さびしい。

そのとき、美人な女の人が話す前に違う声が聞こえた。

おばあさんでもなく、私でもない声だ・・・・・・でも、美人な女の人は話し続けている

どうやら、私にしか聞こえないらしい

――――――――――――――――――――――――助けて

また聞こえた・・・・・その言葉が頭の中に響いていく・・・・

最後にとても残酷な言葉が頭に響いた。

――――――――――――――――――――――――みんな死ねばいいのに・・・・

そのあと私は、突然の頭痛がして気を失ってしまった。

私に幸せなんかやって来ない・・・・

あのときから、そう感じてたと思う。

第3話：あの声（後書き）

文の間違えなど、あったと思いますが、
読んで下さってありがとうございます！！！

第４話：正体

――――――みんな死ねばいいのに・・・・・

あの声は、そう言った。　なんでそんなことを言ったのか分からない。　あの声は何がしたいのか分からない。　あの声は誰なのか分からない。

でも、すごく悲しそうだったのは分かる・・・・

家族を失ったときの私とあの声の悲しみは似ている気がする・・・・

「ねぇ、大丈夫??」

そう言われて、目が覚めた・・・・

起きてみると、そこにはいつものお母さんの姿ではなく美人な女の人とおばあさんがいた。

昨日の人達だ・・・　私は昨日気を失った所で寝ていた。壁は真っ赤に血まみれで、
昨日とどこも変わっていない。でも一つだけ変わってる所がある！！
家族の死体がない・・・　私は身の回りも見て、家族の死体を捜した。
そんな行動をしていたから、おばあさんが言ってくれた。

「あんたの家族なら、もう土に埋めといたよ。」
私は驚いた・・・
「え??」
思わずそんな声がこぼれた。

この人達は私の家族を殺してないの??　じゃあ、なんで私の家に??

そんな疑問もわいてきたけど、正直あんな哀れな死に方をした家族を見ないことでよかったと思っている。

「あなたに言いたいことがあるの。」
美人な女の人はそういって話始めた。

「私達はね、ここよりすごく遠い所に住んでるんだけどこの家にとても強い魔力を感じたの。
来てみたら、もうあなたの家族はその魔力を持つ何者かに殺されていたわ。」
え??魔力??　何のことを言ってるの??
何者かって人間じゃないの??　頭のなかでいろんなことが混乱している。

「あなた達は何者なの？？」
私は一番疑問に思っていたことを聞いた。

「魔女よ。」
その答えで、ますます混乱する。
魔女？？意味わかんない・・・・・　そんな私におかまいなくに美人な女の人はまだ話しだす

「あなたが生きててよかったと思うわ。でもね、あなたを見たとき弱いけど魔力を感じたわ。
最初はあなたが殺したんじゃないかと思ったけど、あなたの魔力は私達が感じた魔力よりもぜんぜん小さくて弱いからちがうと思うわ。
それに、家族を殺すひどい人間なんているわけないものね。」そう言って、かすかに笑った。

もうそんな話聞きたくない・・・・・・

美人な女の人はくわしく話してくれたけど、私は聞かないようにした。
頭がだんだんおかしくなるから、聞きたくなかった。
魔力、魔女、家族を殺した人。それだけで、もう精一杯だった。
すると、ずっと黙ってたおばあさんがはっきりと私に言った。

「あんた、魔女になりな。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・

その言葉が私の耳にずっと響いている。

・・・・・魔女なんてなりたくなかった・・・・・・・

第４話：正体（後書き）

だんだん、主人公のキャラが変わっちゃいました（泣

感想、アドバイスよろしくお願いします！！！

第5話：運命

・・・・・・・私が魔女になった日・・・・・・・
・・・・・それは、運命という名の扉を開けた日・・

「魔女になれ？？　・・・・　なんで私が魔女なんかにならなきゃいけないのよ！！」

私はそう言った。　けど、おばあさんは言う。

「自分に不思議な力があると感じないのか？・・・その力がお前の魔力だ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私のあの力の事をこの人達は知ってるんだ。

そう思うと、私は何も言い返せなくなった・・

「まぁ、あんたが魔力を持ってると分かった以上嫌でも魔女になってもらう！」

おばあさんが睨みつけながら言う・・・・

私は恐怖を感じた。　「怖い」と心の中で何回も言ってる・・・

おばあさんが一歩、一歩近づいてくる。　体がだんだん震えてくるのが分かった。

「嫌だよ・・・・・い、いやぁ～！！！！！」
そういい捨て、私は家から飛び出した。
・・あの二人の魔女から、逃げ出したんだ・・・・・・・

私は走りながら後ろを見て、あの二人が追いかけて来てないか確認し、ゆっくりと速度を下げた。

ここは小さな公園だ。別に家族との大事な思い出があるわけでもない。けど、なぜかここに来ていた・・・・

この公園には、たくさんの子供達が楽しそうに遊んでいた・・・
＜一緒に遊びたい。＞初めてそう思った。でも、みんな私を見ると遊ぶのをやめて逃げるように帰っていった。
あんなに楽しそうに笑っていた子供達が、だんだん減ってくると私は悲しくなって、
帰ろうとしている一人の女の子の腕をつかんだ。
その子は、とてもびっくりして泣きそうだった。＜一緒に遊んでもいい？＞そう言おうとしたとき、女の子が叫んだ。

「触らないでよ！！！　化け物！！！！！！！！」

女の子は、手を振りほどいて私から逃げていった・・・・・
私は、ショックで仕方なかった。　前までそう言われても家族がいるから平気だった。
けど、今はその家族さえいない・・・・・・

私は、その場でしゃがみこんでしまった・・・・・・
一人でずっと泣いていた。　黙々と・・・・・・・・・・・・・

やがて、二人の女性が近くに寄って来てくれた。
それは、あの二人の魔女だった・・・・・・
今はもう恐怖心もなにもなかった。　二人が、優しい目で私を見てくれたからだ。

「魔女は人間に嫌われて、孤独な生き物なの・・・・・・・・・・
でも、人間にはない能力をもち、この世界を救えるのも魔女よ。」
美人な女の人はそう言った。

「別に、今すぐ魔女になれとは言ってない・・・」
と、おばあさんも言った。

それを聞いて私は決意した。
二人の方を向き、二人を見つめながら言った・・・・

「私を・・・・魔女にしてください！！！」

私は、人間の人生を捨て魔女として生きることにした・・・・・・・

第5話：運命（後書き）

どうでしょうか？？　まだまだ続きます！

感想や、アドバイスをよろしくお願いします！！

第二章

・・・・・・これが私の選んだ運命なんだ・・・・・・・・・

私が魔女になって、もう一週間が過ぎた。
私は今、魔女の家に住んでいる・・・・・・

あの出来事で会った二人の魔女にこの家に連れて来られた。
この家は、ものすごく古い家だ。
聞くと何百年も前に造られたらしい。壁は崩れているし、窓はすべて割れている・・・・
　まさに魔女の家だろう・・・
この家に住んでいるのは、おばあさんの魔女と美人な女の人の魔女、そして私。

おばあさんの名前は、エリーヌと言うらしい。今のところ、ものすごく怪しい人。
美人な女の人の名前は、アンネと言う。とても優しい人だ。
魔女の生活は、人間の生活とあまり変わらなかった。
学校へは、行かないがほとんど魔術の勉強だった。教えてくれるのはいつもアンネ。

今日も、いつものようにアンネと魔術の勉強をしているとエリーヌがやってきた・・・・
エリーヌは、私がこの家に来てから会ったときがない。
食事のときも、寝るときも、私が魔術の練習をしているときも、いつも自分の部屋に閉じこもっていたから・・・・・・

「カーリー、私と一緒に来な・・」
それだけ言うとエリーヌは、自分の部屋へ行ってしまった。
私は、急いでエリーヌの後を追った。
・・・・・・・一瞬、不安そうな顔をするアンネの姿が見えた・・・・・

エリーヌの部屋は、初めて入る・・・・
部屋の中は、暗かったが大きな一つの机の上にろうそくが一本付いていた。
机の隣にエリーヌが立っていたので、私は向かい合いになるような位置へ行った。

「これから、魔女の契約をする！」
「え??」

私はついそう言ってしまった。

エリーヌは言う。

「あんたは、魔女になるとは言ったけどちゃんとした契約はまだ行っていない・・・・」

「契約とは・・・・何をやるんですか??」

私の質問にエリーヌは、答えてくれた。

「儀式だ・・・魔女になるためのな・・・・　　ナイフで、自分の血をこの紙にを流しなさい」

そう言われ、差し出されたナイフで自分の手を浅く切り、変な文字ばかり書いてある紙に血を流す・・・・・

「私がこれから言うことを続けて言いな!!」

エリーヌは、そう言い真剣な顔で私を見つめた。

「我は、魔女になる。」

「わ、我は　ま、魔女になる。」

「どんなことが、あったとしても」

「ど、どんなことが、あったとしても。」

「この血に誓い、この命に誓おう。」

「こ、この血に誓い、こ、この命に誓おう」

「我は、永遠に魔女となろう。」

「わ、我はえ、永遠に魔女になろう。」

私は、たくさん噛んでいたけどなんとかその誓いを言えた。

すると、私の血に染まった紙が急に光り消えてしまった・・・・・・

あんまりにもあっけなく終わってしまった気がする。

何が起こったのかも分からない・・・・・

でも、体が・・・血が・・・魂が・・・変わってしまった気がする・

・・

「これであんたは、本物の魔女だよ」

そうエリーヌが言ってくれたので、なんだか安心してしまった。

私が「本物」の魔女になって後悔するのは、ずっと先のお話・・・・

第二章（後書き）

なんか中途半端な終わり方ですみません・・・

第6話：召し使い

…［本物］…

…［本物］の魔女には召し使いがいる……

私の召し使いも私と同じように苦しまなければいけないのなら、私なんかに会わなければいいのに……

私は、昨日［本物］の魔女になった。

体には、変化はないが力にはすごく変わってしまった所がある。

前までの私は人が思っていることが分かったり、探し物がどこにあるか分かったりしたけど今の私は予知夢もできたり次々と魔術や魔法が使えたりした。

エリーヌが言うには、これが私の本当の魔力らしい。

［本物］の魔女になると、今まで教えてもらえなかったことをたくさん教えてもらった。

もちろん、魔術の勉強のこともだけど魔女の生き方なども教わった。

そして、魔女には召し使いがいることも知った。

召し使いの事は、アンネから聞いた。
召し使いは、主に人間で魔女に憧れているものや魔術を使いたいもの達がなると言う。
しかし、魔女の召し使いになりたい人なんてこの世の中にそういるわけない。
なので、今はある一族が必ず魔女の召し使いになるように決まっている。
その一族は、魔女の家の近くに住んでいる。魔女の家は、森の中にあって周りには木しかない
でも、1～2件だけ家がある。それが召し使いの家だ。　いく日か前、窓の外をみると5歳～8歳ぐらいの子供達が遊んでいたときがあった。その子達もきっとその一族なのだろう。

と、そうやって今まで言われてきたことを思い出し、整理した。
正直、ものすごく疲れている。最近寝れてないせいでもあると思う。
気分転換に外に出ることにした。

外は、まだ明るくてお日様がきらきらと光っている。朝なのだろうか。
魔女の家にいると、朝なのか夜なのか分からないし夏なのか冬なのかもよく分からなくなってしまう。だから、こうして外にでることもだんだん日課になっている気がする。
あくびをしながら、歩いていると後ろから声が聞こえた。

「あ！…あなた魔女??」
その声にびっくりして私が振り返ると、見知らぬ女の子が一人立っていた。
その子は、私と同じぐらいの身長をしていてとても可愛い女の子だった。
茶色いローブを着ていて、片方の手にはホウキを持っていた。
なんだか魔女みたい。そう思ったが違かった。
「私は、召し使いだよ」
その子がそう言った。そして、
「私の名前は、ガーノって言うの。　よろしくね、魔女さん。」
ガーノはそう言い、私の前に手を差し伸べた。

私が初めてあった召し使い……

第6話：召し使い（後書き）

文章力が下手だったせいかだんだん伝わりにくくなっていて心配です。

第7話：友達

……友達……

あの頃の私は、「友達」ができるなんて夢にまで思わなかっただろう…

ガーノは私に手を差し伸ばす。　私は、その手をどうすればいいのか分からなかった。

なんでこの子は私なんかに話しかけるんだろう。どうして、手を差し伸ばすんだろう。

そんな気持ちでいっぱいだった。

するとガーノが私の手を勝手に繋ぎ、私達は握手をした。

「あなたの名前は？？」

と、ガーノに聞かれ私は戸惑いながら答える。

「カーリーだよ。　魔女なんだ」

そう答えるとガーノは「やっぱりね」と言う表情をする。

「え～～と、私は召し使いなんだけど…カーリーは魔女なんだよね？？」
「う、うん。」
いきなり名前で呼ばれた。
「もう、自分の召し使い決めたの？」
「え？　あぁ…まだ決めてないよ。」
そういえば魔女には自分の召し使いを持っているんだったな。
「じゃあ、私がカーリーの召し使いになってあげる！！」
「……え？？いきなり何を？？？」
何を言ってるの？？
「だ～か～ら～、カーリーが魔女で私がカーリーの召し使い！！
分かった？」
「へ？？　あ、う、うん分かった。」
適当に返事を返すと、
「あ～～、ぜんぜん分かってないでしょう！！、いいや、エリーヌ様に言っといて！私はガーノという可愛くて、優しい女の子を召し使いにしましたって！！！」
エリーヌ様とはエリーヌのことだろうか？
それにしても、強引な子だなぁ。
「可愛い顔が台無しだよ。」
つい、そう言ってしまった。すると、ガーノが怒ったように
「あんたみたいなブスに言われたくない！！」
カチンっと頭の中に何かが鳴った。
「ぶりっ子にブスなんて言われたくないよ！！」
そう口げんかを私達は言い合い始めた。

1時間後・・・
「バカ！」

「ブス！！」
……なんだか幼稚な言い争いをしている気がする。
二人とも疲れてその場ですわりこんでしまった。しばらく沈黙が続く。そのとき、カーリーが話しかけた。
「なんか、魔女と召し使いと言うよりけんか友達みたいだったわ。」
その意外な言葉に私は驚いた。また何か悪口を言われると思っていたから。
それに、友達といってくれたのがなんだか嬉しかった。
「ねぇ、なら魔女と召し使いっていう関係じゃなくて友達としてみてくれない？？」
そう勇気をだして聞いてみた。
「……」
返事がない。やっぱり嫌なのかも。そう不安になってきた。
「別に最初からそのつもりだったけど。」
そうガーノが言ったので安心した。
「でも、エリーヌ様には私がカーリーの召し使いになったことちゃんと言ってよ！！」
ガーノは、そこを強調して言った。
「うん、分かった。」
私はそう嬉しそうに答える。

「そろそろ、家に帰る。」
ガーノはそう言い、立ち上がる。私は、
「明日も、会える？？」
と聞いた。すると、ガーノが
「当たり前じゃん」
と答えてくれた。

そして、私達は別れを告げた。

あの日、私は召し使いができて…いや、友達ができてとても嬉しかった…

第7話：友達（後書き）

新キャラ登場です！
ちょっとずつキャラを増やしていきたいですね。
感想、アドバイスよろしくお願いします！！

第8話：悪

……悪魔……

魔女にとっても、人間にとっても嫌われる生き物……

ガーノに出会った次の日に、私はエリーヌとアンネに告げた。

「ガーノを私の召し使いにします。」

二人とも驚きはしなかった。最初からそうなることを知っているみたいだった。

「昨日、あなたが嬉しそうな顔をしてたのはガーノと会ったせいかしら？」

アンネが微笑みながら言う。え？？　私、そんなに顔に出ちゃうのかな？？

「私は、賛成よ。ガーノは魔術の能力はないけれど、たくさんの知識を持っているし。」
アンネはそう言う。すると、エリーヌも続けて言う。
「まぁ好きにしな。正直、心配な所もあるけど二人で頑張ればなんとかなるはずだね」

これでいいのだろうか、二人は賛成してくれるみたいだ。
　早く、ガーノに知らせたい。
その思いが止まらなくなって家を飛び出そうとしたとき、
「カ、カーリー…」
と、エリーヌに呼び止められた。
「??　何ですか???」
「いや、別に…どこへ行くんだ?」
「あ、ガーノに会いに行きたいんですが。」
「そうか、じゃあ帰ってきたら大事な話があるから早めに帰ってきなさい。」
「??はい…」

そんな会話をした。なんだかいつものエリーヌではなかったような気がする。なんで大事な話を今言わないんだろう?そう思ったが、ガーノのことを思い出して急いで家を飛び出す。
さっきまで思っていた疑問はすぐ消えてしまった。

走る、走る、走る。走りながら、ガーノが驚く姿を思い浮かべる。きっと喜ぶだろうなぁ。そんな事を想像していたら誰かとぶつかり、転んだ。相手も転んだらしく、立ち上がるまで誰だか分かんなかった。
その姿は、茶色いローブを着ていて、片手にはホウキを持っている。

その人の顔は可愛くて、昨日から見慣れている顔だ。　　そう、ガーノだった。

ガーノも自分が私の召し使いになれるか心配で走ってきたらしい。
結果を聞いた彼女は私の想像通り、いや想像以上に喜んでいた。
「やったぁ〜〜、やったぁ、やった、やった、やった、やった、やった、やった、やったぁ！！！！」
と。この子何回「やった」を言えば済むんだろう。昨日はぜんぜん不安そうじゃなかったのに。むしろ自信満々だったし。

「…これで私もアイツらと戦える。」

そうガーノが言った。私は、ある言葉に疑問を感じ、聞いてみた。
「アイツらって、誰？」
「え？あぁ、私達の敵だよ。」
「？？敵って誰？」
「えぇ？！知らないの？？」
「？？？？うん？？？？」

ガーノが何を言っているのかまったくと言っていいほど分からない。
「エリーヌ様、教えなかったのかな？？じゃあ、私が教える！！」
ガーノはそう言ってある質問を私にした。

「私達が、もっとも憎んでいる生き物ってな〜に？？」
私は迷わず答えた。
「人間。」
だけど、その答えは違ったらしい。
「う〜ん、確かに人間もそうだけどその人間も嫌っていて実際にいるかもよく分かんない生き物だよ。」
「そんな生き物なんているの？」

私の問いにきっぱりとガーノは答える。
「いるよ。」

「正解は……悪魔…」

悪魔？なぜ悪魔なの？
私は、魔女になる前のことを思い出す。家族以外は私のことを人間扱いしないでみんな自分を恐れていたことを。私を化け物と言っていた女の子のことを。　人間のほうがよっぽど憎い。
「悪魔なんて、最悪の生き物よ。」
ガーノが暗い顔で話し始める。

「もともとこの世界には、魔女なんていなかったんだよ。召し使いだっていなかったよ。みんな普通の人間で差別のない平和な国だったんだよ。　でも、悪魔がこの世界にきたせいで平和が壊れちゃったんだ。悪魔がきて、たくさんの人間達が殺されて、やがて戦いが始まったの。戦いのために男達は戦場へ行き、死んでいく…女達は悲しみそして男達の後を追うように死ぬ。　けど、そんな中でも頑張って戦っていこうとした女達がいたの。それが魔女なんだ。夫の仇を、父の仇を、兄弟の仇を、恋人の仇を…とるために禁断の魔術をつかったりして悪魔と戦い、ついには勝ったんだ。そしてまた平和が来た」

ガーノはそこまで言い、ゼェ、ゼェと息を整えた。あれだけ長い言葉を言ったんだから息が乱れるのも無理はない。

確かに、悪魔はひどい。でも、戦いに勝ったんだからいいのではないのかな？？と感じた。
ガーノはまだ言い続ける。

「人間達は、魔女に感謝し、そして祝った。また平和が来た！って。でも、その平和を妬んでいた奴らがいた。それは、戦いに生き残れた悪魔。その悪魔達は最後の力を振り絞って人間にある感情をやった。それは　［恐怖］　その［恐怖］を持った人間達は魔女を恐れ始めた。悪魔を殺す事ができる魔女なのだからいつか自分達も殺されるのではないか、そう人間達は思いはじめた。そして、人間達はある事を考えたんだ……

殺される前に殺してしまえ！！！！

人間達は、簡単に魔女達を殺せたよ。　魔女達は、人間達を信じてたんだもん。　裏切れるなんて思ってもいなかったんだもん。魔女達は必死に、逃げて、逃げて、逃げてなんとか助かったのが私達の一族なんだって。」

ガーノからこの話を聞くまでは、自分は人間を憎んでた。ガーノからこの話を聞いた自分は、人間ではなく悪魔を憎む。そして、魔女達にこんなに辛い過去があった事を知りとても悲しんだ。なんで、魔女だけがこんな目にあわなきゃいけないんだろう、そう思った。

私はガーノに聞く。

「悪魔達は、まだ生きてるの？」

ガーノはすぐ答えてくれた。

「いるよ、人間達の世界にた～くさんいるよ。」

「それじゃあ、またこの世界を滅ぼすんじゃないの？？」

心配に思ったことを聞く。　ガーノは答える。

「それなら、まだ心配はいらない。魔女達の戦いに生き残った悪魔達が人間にあの感情をあげたときこう告げたんだ。

我らは、1千年後ある巨大な力を持つ悪魔に連れられて、またこの

世界を滅ぼしてやる。

って。　今生きてる悪魔達はその巨大な力を持つ悪魔を待っているらしいから人間達には手を出していない。」

「その悪魔って誰？」

「知るわけないでしょ、でも、その悪魔の名前は知ってるよ。」

「え…教えて！！」

ガーノは呆れた顔をする。

「はぁ～、やれやれ、その悪魔の名は…

ディスペア…」

そんな名、聞かなければよかったのに。

※ディスペア……　絶望

第8話：悪（後書き）

少し、長めに書いてみました。

感想、アドバイスお願いします。

第9話：憎しみ（前書き）

第3話に出てきたあの不思議な声が現れます。
覚えてますか??

第9話：憎しみ

…　憎しみ　…

…私が悪魔を憎しみ始めたのは、このときからだろう…

ガーノから悪魔達の話を聴いて、私は家に帰るところだった。

今まで、人間を憎んでいた自分がとても馬鹿らしく思えた。

ガーノやエリーヌ達は、きっと悪魔を倒すために頑張って生きたんだろう。たとえ、人間達に嫌われても…　でも、私はただ人間達を憎むだけ…

それがとても馬鹿らしかった。
そんなことを考えてるうちに、家に着いた。
　今の私の家は、魔女の家。
この家は、壁は崩れていて、窓はすべて割れている。見ただけで魔女の家と分かる。
この家に、エリーヌとアンネ、私が住んでいる。
そういえば、エリーヌが話したいことがあるって言っていたなぁ…
　何の話だろう??
ふと、そんな事を思い始めた。
そして、いつのまにか日が暮れていて家の屋根には、数匹のカラスがとまっていた。
そのカラス達がいたせいか、いつもより更に気味が悪い家になっていた。

家の中に入ると、エリーヌとアンネがいた。エリーヌはあいかわらず睨むように私を見つめる。でも、アンネの様子は少しおかしい。いつもの笑顔ではなく、悲しそうな顔で私を見ていた。
「ずいぶんと帰ってくるのが遅かったね。」
エリーヌがそう言った。
「すみません。　あの、大事な話って何ですか??」
そう聞くと、アンネは下を向いた。
エリーヌの顔は、曇っていった。
嫌な気分だ…。こういう状況は、絶対最悪な話をされるに決まってる。
二人の表情が私にそう伝えてる。

「カーリー、落ち着いて聞きなさい。」
エリーヌがそう言い、話す。
「あんたの家族を殺した犯人が分かった。」

！！！！！！

え……！！！
私の…家族？？？　殺した？？？　犯人？？？
！！！！犯人！！！！

家族のことは、忘れたわけではない。　思い出したくなかっただけ。
たくさん悲しんだから思い出したくなかった。
犯人に復讐したいと言う気持ちを抑えるためでもあった。

今は、もうその気持ちは抑えられない。
「誰が殺したんですか？」

誰が？　なんで？
　　誰であろうと絶対許せない。
疑問と怒りが頭の中でぐちゃぐちゃになりながらも、そう聞いた。
エリーヌは、一瞬迷ったような顔をしたがすぐにいつも通りの無表情で答える。

「…ディスペア…」

ディスペア？ガーノの話で聞いた名だ。
「ディスペアっていう奴は・・・・」
「ガ、ガーノから、そのことは聞いています。」

エリーヌが説明しようとしたが私は二度も同じ話を聞きたくなかったのであわてて止めた。

「そうか…　あのガーノが話したのか…」
エリーヌは、そう呟いた。

ディスペアは、巨大な力を持つ悪魔。どんな悪魔でもこの悪魔に従う。
そんな悪魔がなぜ私の家に??　なぜ、私の家族を??
「それは、間違えではないんですよね?」
「ああ、たぶん。あんたの家で感じたあの強い魔力は私が見たどんな悪魔よりもぜんぜんすごかったしね。」

「なんで私の家族を殺したんですか?」

「分からない。ディスペアなんて今まで現れたときがなかったからね。…でも……」
「???何ですか????」
「いや、何でもない…」
エリーヌは、何か言おうとしている。でも、何を言いたいのかまったく伝わらない…
怒り狂ってる私はなんだかイライラしてきた。

「そんなこと言わずにすべて教えてください!!」
少し怒りぎみに言ってしまった。

「後悔するかもしれないよ。」
今まで黙っていたアンネが突然言い出した。
でも、私は迷いもなく、

「それでも、話してください。」
と、言った。
「分かった。カーリーがそこまで言うなら教えてやる…
ディスペアが、どうして現れたのか分からない。でも、もしかしたらカーリー、あんたの魔力を感じたからディスペアは現れたのかもしれない…」
「え？…でも私がまだ魔女になる前に殺されたんですよ？」
「あんたは、魔女になる前から弱いながらも魔力はあったとアンネは言ったはずだね。ディスペアだってどんなに弱くてもあんたの魔力を感じたと思う。」
エリーヌは、そう言った。私にはよく理解できない。
「ディスペアは、あんたの魔力を感じる家に行き、あんたの家族を殺した。けど、そこには魔力の主であるあんたの姿はなかった…と言う訳だ。」

ディスペアは、私の魔力を感じて私の家に来た？？
私の家へ来て、私の家族を殺した？？
そのとき、私は学校に行っててていなかった？？
私がいなかったから、家族は殺された？？
私がいれば、家族は殺されなかった？？

私のせいで、家族は死んだ？？？？

「そんな…私のせいで家族は死んだの？」
「そういう訳では、ない。あんたのせいではない！！」
「そうよ！！あなたの家族は殺されたけど、あなたは殺されてはいない。悪魔たちと戦えばいいのよ！！！そうすれば、あなたの家族の死は無駄じゃない。」

エリーヌやアンネが必死で私を助けようとしている。
でも、そんな声は私に届かなかった。

今、あの不思議な声が聞こえるから…

――――――さびしい。

――――――助けて。

この声は、今の私が感じてる感情に似ていることを言ってくれる。
そういえば、この前と同じことを言っている。

ふと、不安が胸を横切る。
この前は、さびしい、助けて、と言ったあとみんな死ねばいいと言ったはず。
もしかして、またそんなことを言うのかもしれない。けど、あの声はそう言わなかった。

――――悲しいよね？
私に問いかけてる？？
――――うん、あなたに言ってるの。
――――家族と一緒に死にたかったよね？
え？？？？？

あの声は、そう言って消えた。なんでそんなに死のことを言うのだろうか？
何もこんなときに来てほしくなかった。

「カーリーどうしたの？」
アンネにそういわれて、意識が戻った気がする。
「何でもありません。　少し、寝かせてください。」
「そう、　分かったわ」
そう会話をして、私は寝室へ行った。

ディスペア、私はあなたを殺したい…
本当に、心からそう思う。

第9話：憎しみ（後書き）

ずいぶん、投稿がおそくなってすみません。
急いで書いたので文字の間違えなどもあるかも…
感想、アドバイスなど、よろしくお願いします！！

第１０話：つらい過去　前

…　過去　…

…私のつらい過去は、家族の死。私の召し使いのつらい過去は、悪魔の友。

私は、あの日寝室で眠れないまま朝を向かえた。頭の中で、『家族は私のせいで死んだ。』と言う言葉が何回も何回もぐるぐると回っている。

そして、あの声の事も考えていた。あの声の主は誰なのか？あの声は、何を言いたいのか？突然現れてとても恐ろしいことを言いにくる。あの声は、一体…

ガチャ。

「おっはよう〜♪」

私が、こんなにも苦しくて悲しい思いをしているのに、私の気持ちを知りもせずガーノが明るく寝室に入ってきた。

「どうしたの？こんな所で寝込んでて。いつもなら私と一緒に遊んでいる時間じゃない？」

ガーノは不思議そうに私を見つめる。正直、今はガーノと話したくない。一人でいたいのに。

「別に…なんでもないよ。悪いけど、ガーノ出て行ってくれる？」

ガーノと話したくないのが顔に出てたのか、私の言った言葉を気にしたのかよく分からないけど、ガーノは少し怒り気味で言った。

「あのさ、私あんたになんかしたかは分かんないけど、どう見てもなんでもなく見えないんだけど！」

だから何？ガーノには関係ないじゃん。早く帰ってよ。

「ごめん、一人にさせて。」

「なんで？具合悪いの？？なら、私が一緒にここにいるよ。」

どうして？一人にさせてって言ってるのに。

「本当に一人にさせて！あんたなんかさっさと出ていってよ！！」

怒鳴ってしまった。私は、気持ちを抑えられなかった。

「い、いきなり何を言うのよ！ちょっと、自分勝手すぎるよ。」

「…　…」

私は何も言わない。もう私の頭は家族の死やあの声のことで精一杯だった。

「ふん！こんな人が私の魔女だなんて…私の友達だなんて思わなかったよ！！！」

ガーノはそう言うと、私に後ろ姿だけ見せて出て行く。

ガチャリ

ドアを開け　　彼女は出て行った。

寝室には一人ぽつりと私はいた。さっきまで口げんかしていたのに、今ガーノは出て行った。

なんだろう？この気持ち。今までだってけんかしたときはあるけど、必ず次の日には謝っていた。なんだろう？この気持ち。ガーノには明日会えず謝れない気がする。なんだろう？この気持ち。今、今私は初めてできた友達をなくしたの…？

私は馬鹿だ。ガーノは心配してくれたのに、私は、私は自らガーノとの友情の縁を切ってしまった。目に泪がたまるのが分かる。

私、これからどうしよう。

バン！！！

カツ、カツ、カツ、ドサ。

彼女は、ドアを開け歩き私のベットに座った。

「な～んちゃって♪」

ガーノは、再び入ってきた。ちょっと、いたずらそうな顔で。

「あんたがそんな態度とるからいけないんだよ。あんた何かあったんでしょ？？言ってよ！！私はあんたの召し使いだし…友達なんだし。」

最後の方の言葉は、一番うれしかった。

「うぐ、ガーノまで、ぐす、ぐすん、私のせいでっ　うぐ、ぐっ、いなくなるかと」

いつのまにか私は大泣きだった。そんな私を見て、ガーノは

「私はいなくなったりしないよ。ず～と、あんたの召し使いだよ。」

そう言い、抱いてくれた。私は魔女になって、初めて人の温もりを感じた。

「ひく、私のせいで、ひく、ぐすん、家族が死んだの…」
私は泣きながら、これまでの事を話した。家族の事、人に不気味がられていたこと、二人の魔女の出会い、私が魔女になった事、悪魔〈ディスペア〉の事、…私のつらい過去のことを……

すべてを言い話す私を、ガーノは黙って聞いてくれた。それがどんなにうれしい事か…
けど、私は［あの声］のことは言わなかった。　と言うより、なぜか言えなかった。

私の話を聞いて、彼女は
「よく、頑張ったわね。」
それだけ言ってくれた。私も、もう泣きやみ落ちついていられた。
すると、突然ガーノは茶色いローブを脱ぎ出した。すばやく脱ぎ終わると、
「実はさぁ、私もつらい過去があったんだよね…」
ガーノから今まで聞いたこともないか細い声でガーノは話そうとする。
なぜかローブを強くにぎりしめながら。

5年前

私が９歳の時の話。そのころの私は、まだ自分の一族が魔女に使える召し使いだなんて知りもしなかった。毎日、毎日人間の子供達と遊んでいた。

そんなある日、いつものようにお母さんに言われた。
「ガーノ、いいかげん人間の子達と遊ぶのはやめなさい。」
「人間の子達じゃないよ！友達だもん」
お母さんは、いつも言う。人間と遊ぶなと。
私だって、お母さんだって、人間なのに。どうして??
「だから、私達の一族は人間に関わっちゃダメなの。…あなたが１０歳になれば教えてあげるけど…ガーノは」
「いってきま～す。」

お母さんの説教が始まる前に私は家をでた。これも、いつものこと。私の家は、なぜか１０歳になると変な儀式をし、隣にある汚くて、窓がすべて割れてある家に行かなければならないと言う。そこで何をするかは教えてもらえなかった…だから私は絶対１０歳にはなりたくないと思っていた。１０歳になったら、何かが変わってしまう気がするから。

この日も人間の子供達と遊びまくって家に帰るとこだった。
帰り道に、一人の女の子に出会った。
その子の顔は見えずらかった。茶色いローブを着ていたし、なにより泣いていたからだ。
「どうしたの？」
そう聞いても、彼女は何も言わない。ただわんわんと泣くだけ。
「名前は、何って言うの？　私は、ガーノ。」
そう言うと、泣きながらだけど答えてくれた。

「ヒク、ウグ、わ、私の名前は、…サッド。」

これがあの子との出会い。

第１０話：つらい過去　前（後書き）

投稿するのいつも遅くてすみません。

第１０話：つらい過去　後

〔サッド　（ｓａｄ）　〕…　意味は、『嘆く』、『悲しい』と言う。
嘆き悲しんだ悪魔の少女の名前。

ガーノは本当に困っていた。
この泣いている少女は、何も言わずガーノの言ってることに耳も傾けようともしない。
唯一分かったことは、彼女の名前が〔サッド〕と言うことだけ。
名前が分かってもすべてが分かったわけじゃない。なんだかこの少女は、このままずっと泣き止まない気がする。　ガーノはそう思いながらも彼女と一緒に座って話してくれるのを待った。

「う、グス、あのね、」

何分か、いや何時間か経った後サッドは話してくれた。
「私のね、お母さんとね、お父さんが…殺されたの。」
え？…　何言ってるの？この子？？…
「冗談はやめてよ。」
私は少し笑いながら、サッドに言った。　泣きすぎて頭おかしくなっちゃったのかな？　そう思っていたから。でも、サッドの瞳を見ると本当だと感じた。私の住んでいる所ではサッドと同じような色の瞳の人はいなかった。緑色の彼女のその瞳は私の心の何かを引き寄せていく。
「本当、なんだね？」
そう聞くとサッドは、うなずいた。彼女はもう泣いてなんかなかった。私に助けを求めてる。

「サッドの家に連れて行って。あなたのお母さんとお父さんは生きてるかもしれないよ。」
「でも、もう…」
「いいから、連れてって！！」
強引に彼女の家に連れてってもらった。
この時の私は何を考えていたのだろうか…サッドの両親は生きていてほしい。そう希望を思っていたんだと思う。

サッドの家はボロくて今にも壊れそうな小屋だった。サッドの家にたどり着くまで何時間も掛かってしまったのも、サッドの家の近くには家は一軒もなかったのも、サッドの家が森の中にあったからだろう。
サッドの家に入ろうとすると、彼女は私を止めた。
「もう、やめよう。私のお母さんとお父さんは死んでいるんだから！」

「でも、生きるかもしれないじゃん！！」
無理やり家に入る。そこにはなんとも言えぬ光景が…
壁も床もすべてが真っ赤。本当に人が住んでいたような感じはない。吐き気を感じた。
そのなかで、大人の死体っぽいのが2体並んでいる。サッドの両親だ。生きてるかもしれない。けど、近くへ行ってみるとその姿はなんと哀れな…なんと醜い…
サッドの両親は、胴体、頭、両手、両足バラバラにされていた。見ているだけで気持ち悪くなる。
「サッド、あなたの両親は誰に殺されたの？」
気持ち悪さを抑えながらも、聞いてみる。
「魔女だよ。」
サッドはそう言い、ローブを着たまま強く握り締めた。そして、また泣きそうになる。
「だって、私のお父さんとお母さんは魔女に嫌われてたって言ってたもん。私が家に帰ってきいくとき黒いローブの女が走ってきてすれ違ったもん…絶対魔女に決ってる。」
「許せない、そんな魔女！」
私は、そう叫んだ。本当に許せなかった。サッドの両親をあんなふうに殺した魔女が。
「なんで？なんであなたがそこまで思うの？」
「友達だからだよ！！」
サッドの問いに私がすぐにそう答えると、サッドは少し嬉しそうに笑った。でもそれは一瞬のこと。
「魔女は許しちゃダメ。そうだよ、魔女には仕返ししなきゃ…私のお母さんやお父さんを殺したみたいに…復讐しなきゃ…」
「え？」
サッドのその声はもうあの幼くて可愛い声ではなく、怒りに満ちた暗い声。サッドの言葉はよく理解していなかった。ちゃんと聞こえ

てたけど、幻聴だと思ってたのかもしれない。もう彼女の顔は見れなかった。でも、とても恐ろしい顔だったはずだ。彼女の後ろ姿を見れば誰でもそう思う。茶色いローブを着た彼女は私を置いて、家を出て行った。

そして私は、今一人で自分の家に帰ろうとしている。サッドが恐ろしく思えて後を追えなかった。さっきまで魔女に怒りを感じてた私が今はサッドから恐怖を感じている。
サッドはどこへ行ったんだろう。…まさか魔女を殺しに行ったのではないだろう。
そんなことを考えていると、もうすぐそこに家があった。
今日あったことをすべて忘れてしまいたいせいか、私ははやく家に帰って寝たかった。
私の家の近くにある汚い黒い屋根の家を通り過ぎようとした。

―その時、　［悪夢］が始まる。

突然、その汚くて黒い屋根の家の扉が開いた。
この家に住んでいる人がいたの？もしかして、魔女？？
私はとっさに草むらの方に隠れた。家の方から数人の声が聞こえる。盗み聞きはしたくないけどしょうがない。もしかしたら、サッドの両親のことが分かるかもしれない。
「悪魔――ディスペア―あら―ました。」
「エリーヌ様、私達魔女が―しなければ―せん。」
声が聞こえづらい。もう少し近くへ行かなければ。そう思った瞬間、
「しかし、―サッドの両親―なぜ？」
サッドという名が聞こえた。私はもっと耳を澄まし会話を聞こうとした。
すると、家から人が出てくる。黒いローブを着た魔女が3人。

1人目は、年をとったおばあさんでエリーヌと呼ばれてた人。
2人目は、魔女にしては若くて美人な人。
3人目は、…　　え？なんで？？
「お母さん？！！」
思わず声に出してしまった。3人が私を同時に見る。
「ガーノ、あんたなんでこんなところに？」
それは、私の台詞だ。なんでお母さんがこの家から？？

その驚きも一瞬の事だった。

「殺してやるー！！！！！！！！！」
一人の少女の嘆き声が聞こえる。不安が胸をよぎる。
あの茶色いローブを着て、あの緑色の瞳を怨みの色に変えた少女が立っていた。
　手にはナイフを持っている。もし、サッドがこちらへ来たら…
　お願い、誰かあの子を止めて！！！
サッドがこっちに向かってくる！誰か、誰か、誰か、あの子を…

　ドス。
鈍い音が聞こえた。人が刺された音？

サッドの手には、ナイフ。そのナイフはもう血塗れ。刺されたのは、
「…お母さん…？」
「う、うぅ…」
お母さんの苦しそうな声。
お母さんのお腹はだんだん赤く染まっていく。
　嘘。　嘘だ！！　こんなの嘘だ！！！
私は目の前の現実が信じられなかった。信じたくなかった。
「アハハハ、ハハ、殺した、殺せたよ。お父さん！お母さん！！
あの醜い魔女を殺したぁーー！！！！！！！！」

サッドはもう狂っていた。もう彼女は人間ではない、　　［悪魔］だ。
その悪魔に二人の魔女が呪文を言っている。
すると、［悪魔］は、…　［サッド］は、消えた。茶色いローブを残して。

「それで、サッドはどうなったの？」
私は気になって、ガーノに聞いた。
「どうなったって、本当に消えただけだよ。でも、死んではないらしいんだ。」
「そう…お母さんはどうなったの？？」
「お母さんは、、死んじゃった。」
ガーノの言葉はあっけなかった。
「それと、サッドは魔女が両親を殺したって言ってたけど、エリーヌ様は違うって言ってた。あのコの両親を殺したのは誰か分からないけど、私はエリーヌ様を信じる。」
ガーノはため息をついてから、また話す。
「私ね、あの日から良く思うんだ。私はサッドの友達だった。もし

かしたら、あの時必死にサッドを止めてればこんなことにはならなかったかもしれない。って。」
「…そっかぁ。」
彼女はどうしてそんなに不幸な運命をたどってきたんだろう。
ガーノはあの茶色いローブを着る。かって、友達だったサッドが残していった物。
「あ～ら、何同情なんかしてるのかしらね～悲劇の魔女っ子さ～ん??」
突然、ガーノはふざけた事を言ってくる。
なんか上から目線で言われて悔しい。
そんなことを思ってたら、さっきまで自分が一番悲劇を感じてるとおもったのが馬鹿らしく思えた。
「ぷぅ、ばっかみたい。」
その日は、一日中ガーノと話していた。つらい話にまけないぐらいの楽しい話をして。

第１０話：つらい過去　後（後書き）

投稿めちゃくちゃ遅れたぁー
しばらく、お休みしようかな？
読んでくれた方は感想よろしくお願いします！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0877d/

ある魔女のお話

2011年1月28日16時07分発行